

昭和前期における宗学研究の周辺 (四)

——和辻哲郎著『沙門道元』の考察——

若 月 正 吾

一 同書成立の時代的背景

「沙門道元」⁽¹⁾が、昭和前期における道元禅師研究の端緒を、その周辺研究においてなすものであることに異論をさしはさむ者は、おそらくないであろう。

それほど、この著は有名であり、日本思想史にあらたな発見を道元禅師に見出すものとして、昭和前期の道元研究の原点をなす古典的位置をその後獲得している。いわば不朽の名著とも云うべきものである。

また宗門としても、この書によりて道元禅師が昭和前期における思想界の寵児となるに至るのであるから、おろそかにできないことは云うまでもない。

ただし、厳密にいうと、この書は大正十五年（一九二六）十月二十五日に、その第一刷が発行されており（岩波書店）、昭和前期の研究というにはいささか問題が存するであろう。

しかし、大正末期をいくばくも残しておらず、ほぼ昭和初期に接続するものであることは、明らかであり、その影響するところは殆んど昭和前期を覆うのであるから、これを昭和初期における道元研究の端緒をなすものという従来のとり扱いは方に疑問をさしはさむものは尠いのである。

もちろん、大正十五年に上梓されているのであるから、その原稿はすべて大正期に書かれたものであり、その点より厳密に云えば大正後期の研究というのが適切かも知れない。が、如上の理由により、この書を昭和前期における道元研究の原点をなすものと考え、その後の「周辺」研究史を系譜づけようとするのである。これが現在、いちばん合理的な研究方法ではあるまいか。

さて、著者は、その序言で、ひとくちに言って、道元禅師の宗門からの解放を叫んで止まない。今から見ると、おかしいくらいである。大正末期から昭和初期にかけては、これほ

ど道元禪師は宗門において独占されていたのであろうか。と
いうことは逆に云えば、宗門がしっかりとその宗祖を把えて
離さなかったことを意味しており、一概に批難すべきではな
いかも知れない。宗門が権威をもって宗祖を奉持するかぎ
り、よく門外漢の窺うところではないからである。宗外の者
から云々されるのは、それだけ宗祖の権威がゆらぎかけてい
る証拠とも云える。

それにしても古来の権威を保持するあまり、宗祖に固定的
な宗学的解釈を施し、時代とかけ離れた位置におくというの
では、かえって宗祖を歴史から抹殺するにひとしい。

おそらく和辻博士の「沙門道元」は、大正デモクラシーの
思潮をうけて、自由な研究方法が大胆に文化の各領域にひろ
がった時期に書かれており、陋固たる宗乗の中に立ちこもる
宗学者たちの姿勢が、いつしか道元禪師そのものの宗教的生
命を枯渇せしめることを憂い、ひろく日本文化全体への解放
を高調したものと思われる。

それにしても和辻博士の研究姿勢は、あまりにも低く謙虚
である。まず「最初に先づ自分が禪に就て門外漢である」こ
とを序言でくりかえし述べ、「ただ単に道元に対する驚嘆を
語るに過ぎない」とさえ云っている。

そして、博士のころみる「文化史的理解」なるものが、
禪師の宗教把握において、いかなる意味をもつか、との疑問

を最初に呈して、その行論を出発せしめている。

いづれにしても哲学的な方面から、道元禪師を研究する場
合、大切なことは禪師の著書が論理的表現の可能性を有し
て、その哲学的推論の対象に堪え得るかということである。

周到なる博士は、この点を次の如く説明する。

「もし道元の真理が純粹に直伝さるべきものであるならば、何故
に彼はその多量な説教の書を書き残したか。

云ふまでもなく彼はそれによって彼の真理を伝へ得ると信じた
からである。彼自身は修行の際に語録を読むことをやめて専心に
打坐した。しかし打坐を重んずることは言葉による表現と背馳す
るものでない。彼は『邪師にまどはされて』あるもののために
『仏家の正法を知らしめん』として正法眼蔵を書き始めた。『頌
につくらずとも心に思はんことを書出し、文筆とのはずとも法
門を書くべきことを説いて、『理だにも聞えたらば、道のために
は大切なり』と云った。然らば与ふるものの側に於ては一切の論
理的表現もまた可能とせられるのである。」⁽²⁾

和辻博士のこの書につづく、秋山範二氏の『道元の研究』
においても、いかにして道元禪師が、そのころみる哲学的
考察の対象となりうるかを縷説し、宗教人ばかりでなく理論
人としての禪師を規定するのに苦心しているかは、宗学研究
の「周辺」(一)(仏教学部論集第八号)を見ればあきらかである。

博士は、如上の論拠を出したのち、かえって現時では禪師
の著述に直参する方が、参師問法を当今の禪僧たちにこころ

みるより、効果のあることを力説する。それまでならよいが、いささか筆がすべって宗門そのものの現状を批難するが如き文章に出合うに到るのである。これは宗門を意識しすぎる結果というほかはない。その反動として禅に対して門外漢ということばが随処に出てくる。「このことは門外にあって彼、の、道、を、得、る、こ、と、か、可、能、で、な、い」といふ証拠ではない云々。

しかし謙虚ではあるが、自信を充分に有する著者は、次の如き確信ある発言をなすに至る。

「自分は、理解の自信を持ち得ない道元の真理そのものについて、自分の解釈が唯一の解釈であると主張するわけでない。しかし少くともここに新しい解釈の道を開いたといふ事は云ってもよいであろう。それによって道元は一宗の道元ではなくして人類の道元になる。宗祖道元ではなくして我々の道元になる。自分が敢てかかる高慢な言葉をいふのは、宗派内に於てこれまで道元が殺されてゐたことを知るからである。」⁽³⁾

まことに、思い切った、痛烈なことばである。よくも、門外漢とは云え、これまで云つてのけたものである。

そこで、宗門に於ける宗祖の歪曲された歴史像について、痛憤のことばを叩きつけ、宗門攻撃の手を休めない。

よくも、これまで宗門に関心を持ち、その批判対象にくれたものである。その後の「周辺」研究には、控えめにしか宗門批判は行われていないどころか、宗門に無関心の様子

さえうかがえる。和辻博士の宗門攻撃は痛烈であるが、なにかしら温かさを感じるのは、それだけ宗門のことを想つての発言であり、逆に言えばともかくも批難の対象となり得べき権威を、それなりに維持し得た時代といい得よう。宗門の力が現実的につよかったからこそ、その抵抗も一段とつよからざるを得なかつたのであろう。批難は、いかに手ひどくとも、無関心よりはよく、プラスに転ずる可能性を秘めている点で、けつして排斥すべきではない。

さらに著者は、宗教の真理が「特殊の形」をとって現わされると共に、それが時代を通じて歴史化されることを、キリスト教や仏教を用いて詳説する。

「既成の宗教をすべて特殊の形と見、その宗教の内に歴史的開展を認めることは、畢竟宗教を歴史的に取扱あうことである。……しかし我々が既成の宗教のいづれにも特殊の形に現はれた真理を認め、しかもそのいづれにも現はしつくされてゐない『或者』を求めらば、我々は宗教の歴史的的理解によってこの『或者』を慕ひ行くのである。」⁽⁴⁾

かくして、さいごに自己の研究目的とその方法を適確に明示している。

「また自分が文化史的理解のために道元を使はうとすることも、人類の歴史のうちに真理への道を探らうとするものにとつては、当然のことではなくてはならぬ。あらゆる既成の宗教を特殊の形と

認めるものには、宗教もまた人類の歴史の一部分である。⁽⁴⁾

歴史的研究をとおしての文化理解、思想把握が、この書を基点として宗学の中に流れ込み、宗学そのものの質さえ変えようとしたのが、昭和前期であると云えよう。

それにしても、先人のよく試みざる、文化史的研究を道元禅師に対して実際に行い、その思想と人格を再評価し、再発見した功績は今日からでも高く認められて然るべきであろう。

昭和前期の宗学に関する諸論攷をみると、いわゆる思想史的研究とか、精神史的研究、あるいは文化史的研究の性格を有するものが甚だ多い。これらはすべて、本書に依拠するのは云うまでもなく、その意味で本書の宗学自体に打ちあたえた影響は測り知れざるものがある。そのことは、漸次考察の進展とともに明らかになるであろうが、問題はかかる文化史的研究、思想史的研究と宗学そのものが、どのように交叉し交渉すべきものなのか、この点を明瞭ならしめるのが研究の要旨であることを再確認しつつ、以下の考察をすすめてみよう。

註

(1) 日本精神史研究「沙門道元」著者は後年「沙門道元」について次の如く述べている。

「この一篇は道元の哲学の叙述を企てつつ途中で挫折したも

のであって、その事情はすでに序文に述べておいた通りである。自分はこの未熟な叙述が学界を益し得るとは期待しかねていたのであるが、近ごろ田辺元氏の「正法眼蔵の哲学私観」に接して、この一文が同氏の道元の道元への接近の機縁となったことを知り、非常に歎びを感じた。道元の哲学がこのような生きた問題として蘇生して来たことは、道元のためのみならず、また日本の精神史にとって意義の多いことと思われる。

(2) 同書(二四三―二四四頁)

(3) 同書(二五二―二五三頁)

(4) 同書(二五四頁)

二 道元禅師評価の基準

以上のごとき研究姿勢から求められた道元禅師の再評価が、いかなる基準より行われたかは多言を要しないであろう。

博士は、序言につづいて「道元の修行時代」「説法開始」等の各節で、禅師の生涯のアウトラインを述べ、その人格像を剔出することにつとめている。

その際、禅師の人物評価となる基準は何であろうか。それが博士の限りなく敬慕してやまない禅師の高潔な宗教的人格であることは云うまでもない。

そこで、博士は『随聞記』より多くの引証を行い、禅師の

宗教的人格の具体像を描き出そうとする。

かの建仁寺における故僧正(栄西)の、餓死に類しても貧人に施物した美事が、先づ最初にあげられている。そして、

「栄西が死んだのは道元十六歳の時である。道元は真実の道心の故に山門を辞して諸方を訪ひ、遂に栄西によって法器とされた。

が右に挙げた栄西言行の二三は、道元の実見であるか或は伝聞であるか、明かでない。ただこれらの栄西の言行が道元の心に深い印象を残し、後年の彼によって意味深く語られるところに、我々は栄西の道元に与へた真の感化を想像することが出来る。

官位権力といふが如き外面的な福利を追ふのが僧侶の常道である時代に、あらゆる迫害と逆遇に堪へて真理の探求と慈悲の実行に没頭した一人の僧侶、——さうしてこの僧侶の言行は真実の道を認めた年少の弟子。そこに著しいのは一つの『宗派』の勃興ではなくして、永遠に現在なる価値の力強い顕揚である。後年の道元が仏法に関する師との問答を語らずして、ただ単純に師の言行を語り、さうして『先達の心中のたけ、今の学人も思ふべし』と云ったことは、自分が在来不用意に作つてゐた禅宗の概念を崩れさせるに十分であつた。^(註)

と述べている。博士は何をいわんとするのであろうか。いふまでもなく栄西の高邁な言行の中に道元禅師は、永遠なる仏法の真理の顕揚を見出したのであって、それ以外のなにもでもない。立教開宗のヒントとか、単なる宗派の相承とかいう、さもしい世俗的意図など、なにひとつ存在しなかつた

ことを言いたかつたのであろう。

すなわち一宗一派にとらわれざる法の真実の伝承、そこには禅宗の概念すら後に徹底的に否定して「正伝の仏法」を挙げた道元禅師の、真の仏法の在り方を強調したかつてのあろう。

ということは博士の立場に立つて好意的に見るならば、門外漢という意識の強烈な博士には、宗門は邪魔物以外のなものでもなく、できうれば真の道元研究には脇に片付けておきたい存在である。

したがって禅宗の宗名すら否定した禅師の言動は、この際我が意を得たりと云うべきで、それは博士の自由研究を保証するばかりでなく、禅師を全仏教史に、延いては日本文化史そのものに開放する手がかりを提供するものである。

博士が、栄西からの真の仏法の感化をうけた道元における、禅宗概念のすみやかな崩壊を、かくも強調する裏面には、実は如上の博士の研究方法論の成立可能性が求められたいことを留意すべきであらう。

宗名排斥は、宗門成立以前の、宗教真理がそのまま純粹に顕在した原始僧団においてのみ可能な議論で、永い歴史的過程を経て確立した既成教団において現時点では成り立つ議論ではない。現在そのままの宗名排斥論を唱えるのは、宗門の歴史をなみした暴論にすぎないことは明らかである。

理想の極限に生きた禅師の高潔な宗教的人格を描き出すのに急なあまり、博士は、この歴史的限定を受けて成立した既成教団の性格を深く把えていないようで、もし博士が門外漢と自認するならば、この点はたしかに門外漢というにふさわしいものを持っている、と云ってよい。現時の宗門と関係づけるから、いろいろな誤解も生じてくるのであって、もし道元禅師の思想、信仰そのものを現時と切り離して追求するならば、いづれの人とて門外漢でありようはずはなく、いづれの人とて門内漢となり得るのである。

だが、日本文化史にひろく開放しようという意図から唱えられた、かかる宗名排斥論が、意外にも宗学の主要テーマとなり、昭和前期の宗学論争を彩っているのは周知のとおりで興味ぶかい。

そこには宗学研究者たちが、時代の進運にともない。従来の制約を排して、みづからも宗祖の宗門からの開放を図ろうという意志を有していたことが察しられる。その意味では関心をそそられる問題であるが、反面道元禅師以後の曹洞教団の歴史的展開に目をつむった現実ばなれの、観念論議に走った傾向は注意すべきで、それは昭和前期の宗学研究のひとつの特徴をなしているときえ言い得るくらいである。

それというのも、宗門外の、いわゆる門外漢と自称する「周辺」の道元研究者の、上記のような研究態度に影響され

るところが大であったと私は見たい。

和辻博士を嚆矢とする「周辺」の研究者たちは、当時の先端をゆく斬新な文化史的研究方法、或は精緻な哲学的思索を自由縦横に用いて、禅師を日本精神史上の道元に開放すべく、すぐれた研究成果をあげたのは、見るが如くである。

おそらく一般基礎教養も、世人と変らざるくらいに受けたであろう昭和初期の宗学研究者たちが、これらの研究成果に同調しないわけはなく、むしろすすんで摂り入れようする積極的姿勢を示したことは理解できる。そのことは旧来の固定概念にしばられて動きのとれぬ宗学を——それは、むしろ宗乗といってよいような内容を、昭和初期はもっていた——なんとか現代思想と結びつけようという意図が認められていたと言つてよいであろう。が、そのあまり宗学そのものの範囲をハミ出した形が現れてきたのも事実である。なるほど道元禅師を一般思想界に開放して、オーブンレースのもとで、華々しく自由研究することは嬉しい。しかし、歴史的に成立した既成教団の中で、それなりの制約の下で成立している宗学に、ワクをはずした自由研究などありようはずはなく、むしろ歴史的諸制約を重く背負って、いわば障害物レースをするところに宗学研究の醍醐味があるといえよう。

その意味で、日本文化史上に道元禅師を開放するのは有意義のことであるが、宗門人としては手ばなしに喜べぬ点が存

するのである。周辺研究の功罪を、現時点から、やはり詳しく吟味する必要があるというのは、この意味である。

それにしても博士は、上掲の栄西の故事を感激をもって語ったのち、つづいて明全入宋の事情を、これまた感激をもつて綴っている。いづれも宗門人にとっては、ありふれた常識的の事がらで、目新しいものではないが、そこに強調される禅師の純粹な宗教的人柄を通じて、現時の墮落した宗門から宗祖としての道元禅師を奪回して、日本文化の共通遺産としようとする壮大な意図には目をみはらせるものが確かにある。

如上につづく、如浄禅師会下の参師問法も、また帰朝の宗風挙揚も、すべて上来の精神でつらぬかれていることは云うまでもない。ただし、この辺の叙述は『随聞記』が主たる依拠であるから、それほど教理的に深いものではない。

かくして、「四 修行の方法と目的」が説かれて、やや深くわれわれは博士の道元禅師観にふれることができるのである。

註

日本精神史研究(二五八―二五九頁)